

アマンジャクと兄弟・隠岐郡隠岐の島町郡 令和3年1月12日掲載

収録・解説・酒井 董美^{ただよし} イラスト・福本 隆男



語り手 塩山コフエさん(明治42年生まれ)
収録・昭和54年8月9日

あらすじ

お父さんが死んで、お母さんと子どもが四人いた。お母さんは働きに行つて、子どもたちに食べさせていた。ある晩、お母さんは隣村に働きに行き、握り焼き飯を四つ土産にもらつて帰りかけた。アマンジャクが出て「焼き飯ごせ」と言う。「子どもにやらにやならんけ、ごされぬ」「せいなら、取つて嘔むぞ」。

しかたなく、一つやつて、急いで帰っていると、アマンジャクは「焼き飯ごせ」と次々食べてとうとうお母さんを引き裂いて食べてしまった。そしてお母さんに化け、子どもたちのあるところへやつて来た。「お母さんが帰つたぞ」と言った。

一つか三つの小さい子は喜んで飛びついて行く。しかし、大きな子はどうもは違ふと気づいて、「行くな」と言うけれど、小さい子どもは飛びついて行つた。お母さんは、「寝よう」と言つてみんな寝た。

夜中にぼりっぼりっ音がある。次の子供も「お母さん、何食べちゃう」と聞いた。「うちの干し大根だ」とごまかしたけれど、本当は一番小さい子どもを寝ながら食べてしまったのだ。

気づいた一番大きな子どもが、一人を連れ家の裏、井戸の側の榊の木に登つて二人に、「あれはアマンジャクだね。お母さんじゃないけん」と教えてやつた。

朝、アマンジャクは、捜しに出て来た。「井戸の中へ落ちりやせんかいな」と井戸をのぞくと子どもたちが映つていたので、タモ持つてきてすくつちやれ」とすくうのだそう。いくらすくつても子どもがすくえるはずはない。その格好がおかしいので、一人が「こらえきれなくなつて、くっくつ」と声を出したので上にいることが分かつたアマンジャクは、「どうして上がった」と聞く。「木の蜜に牛の糞つけて上がったわ」と言うと、アマンジャクは、油をつけてまた牛の糞をつけると滑つて、井戸の中へ落ちてしまつた。子どもたちは喜んで木から下りて来た。井戸の中からアマンジャクが大きな蜘蛛



https://kanbenosato.com/minwa/kanchou_201111.html

に化けてごそごそ出て来たので、「親のかたきだ。オトチョコセーチョコ」と言いながらたたき殺した。それで、「夜の蜘蛛は親に似ていても殺せ」と言うそうです。

解説

関敬吾博士の『日本昔話大成』の分類では「本格昔話」の「迷竄譚(とうざんたん)」に属し、その中の「天道さん金の鎖」として位置づけられている。もう少し詳しい解説は出雲かんべの里の「民話の部屋」で確認していただきたい。

隠岐の島町の話の方はアマンジャクが登場しているが、関敬吾博士のオーソドックスな話の方は山姥とか鬼、鬼婆、狼、虎となっている。

隠岐の島町ではアマンジャクの化けた蜘蛛をたたき殺し、「夜出る蜘蛛は親に似ていても殺さなければならぬ」と言われている由来譚として語られているところに特徴があるようである。

(元島根大学法文学部教授)